

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370233

研究課題名(和文) 伊藤永之介の文学がとらえた近代日本農村開発史：発電所建設から八郎潟干拓まで

研究課題名(英文) Rural Development in modern Japan: From the building of power plants to reclamation of Hachirogata lagoon from the view of Ito Einosuke

研究代表者

藤原 辰史 (Fujihara, Tatsushi)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：00362400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：伊藤永之介の描いた東北地方の農村分析によって、わたしは、近代日本の開発政策におけるある重要な性質について明らかにすることができた。それは、開発を進める日本政府が、単に、農村住民の生活世界を破壊しただけではなくて、農村内外の非合法的な世界に対する農村生活者の柔軟な対応力に頼っていた、という点である。たとえば、農村住民たちは、開発政策と不況で苦しむなかで、非合法でどぶろくを作り、販売して苦境を凌いだり、軽犯罪をおかしてわざと逮捕され、一時的に苦境から脱出したりしていた。伊藤文学は、いかに農村住民たちが日本のダイナミックな開発政策を生き延びたのかについて、生き生きとかつコミカルに描いているのである。

研究成果の概要(英文)：By analyzing Ito's literary works on rural life in Tohoku district, I realized an important characteristic of the rural development in modern Japan. The Japanese government did not only destroy villagers' life space, but also depended on their flexible attitude to outlaw's world inside and outside of their hamlet. For example, when they suffered from poverty under the development policy and depressions, they produced and sold illegally liquor or were arrested for misdemeanors by police on purpose and temporally saved themselves from the severe circumstances. Ito's literary works show us vividly and comically how rural inhabitants survive the Japanese dynamic development policy.

研究分野：農業史

キーワード：伊藤永之介 日本文学 開発

## 1. 研究開始当初の背景

伊藤永之介の小説は、これまで彼の弟子であった分銅惇作(「伊藤永之介 愛と怒りの文学」)や佐賀郁朗などによって集中して論じられているし(『受難の昭和農民文学 伊藤永之介と丸山義二、和田伝』)、川村湊によって彼の「萬宝山」(1931)が取り上げられているのみならず、平野謙、小田切秀雄、本多秋五などの代表的な評論家も小さいながら伊藤永之介論を残している。だが、依然として戦前戦中期の「梟」(1937)「鷺」(1938)など彼の出世作である「鳥類もの」や戦後のヒット作『警察日記』シリーズを中心に評価が集中しており、それ以外の文学も含めた全体像は、椋棒哲也の「電源開発文学」論をほぼ唯一の例外として、未だ研究の途上であると思われる。

つまり、伊藤永之介をめぐる研究は、伊藤永之介の作品の重要性にもかかわらず、そもそも少ないうえに、これまで、もっぱら文学者を中心になされてきたが、農業経済学や歴史学、とりわけ日本の開発史の文脈のなかで論じる研究は少ない状況であった。

また、もっとも読者に受け入れられ、映画や演劇にも採用され、商業的にも成功した『警察日記』シリーズにみられるように、権力との迎合的な作品が多いという批判が平野謙などによってなされており、それがかえって、原子力発電所と農村開発の問題などを扱っていた伊藤永之介の先駆性を等閑視する趨勢を作ってしまった。

全集も出ておらず、まとまった研究が少ないなかで、伊藤永之介の先駆性を評価する研究が必要とされていた。

## 2. 研究の目的

本研究では、これまであまり注目されてこなかった、秋田県出身の「農民作家」伊藤永之介の農村開発に関わる作品の収集、分析を行い、とりわけ3・11の東北大震災と福島第一原発事故以降、多くの人の目にあきらかになった中央集権的な開発システムを歴史的に検証することを目指した。

たとえば、『湖畔の村』『消える湖』を代表とする男鹿半島の石油開発ならびに八郎潟の干拓問題の小説などの分析を、当時の時代背景と照合させながら行うことで、戦前から戦後にかけて、民主主義が到来したあとも、一貫してかわることのなかった東京中心主義、地方と中央の非対称的な関係性、膨大な補償金を用いた、金漬けの原子力開発などの機微を明らかにする。

伊藤永之介の作品を読むと、戦前秋田の阿仁銅山開発、満洲国農村開発、朝鮮および台湾の農村開発、水力発電所の開発(電源開発)、戦後のウラン鉱山の開発、ダム建設、八郎潟干拓など、近代日本が経験した開発の出来事が書かれているのみならず、人的資源としてかり出される地方の人々の暮らしや心性も描かれており、近代日本史の貴重な証言でも

ある。綿密な調査に基づく彼の表現は、単に文学史の枠におさまるものではなく、歴史研究と文学研究との融合のなかで、近代日本の人間と自然の歴史、いわば「人間と自然の文学史」を構築する土台として論じるにふさわしい内容と文体を持っている。

そのうえで、田中角栄の『日本列島改造論』にみるような土建国家的な福祉国家モデルではない、オルタナティブな国家と地域のあり方、開発のあり方について示唆を得ることを目的とする。

## 3. 研究の方法

1)伊藤永之介の作品を収集し、読解する。とくに『鷺』や『馬』や『梟』などの作品のなかにも、単なる作品の内在的分析に終わるのではなく、当時の歴史的背景をおさえることで、東北農村が味わってきた精神的・経済的・政治的な従属状態を読み取ることができ

る。2)伊藤永之介に年譜を作成し、伊藤永之介の歴史のなかの個々の作品の位置付けを確認する。たくさんの作品を残した伊藤永之介の足跡を明らかにし、公開することで、伊藤永之介がほとんど忘れられてしまっている状態に抗し、議論のきっかけを作ることをめざした。

3)フィールドワークを通じて、伊藤永之介が突き当たったさまざまな列島の農村開発の問題を日本史的、世界史的視野のなかで捉え直す。

## 4. 研究成果

### 1)複合生業について

平成27年度には、11月に法政大学で開催されたシンポジウム「環境研究を開く」において、伊藤永之介作品にみられる雑業層の様相について報告をした。たとえば、産婆、漁民、曲芸団、詐欺師、売春婦、鷺売り、どぶろく売り、組合活動家など、別の仕事をしながら農業をする人物を描くことに長けていた伊藤永之介は、環境研究においても新しい視野をもたらしてくれることを、論じた。

それは、複合生業という視点である。江戸時代から、農民は農業だけで食べていなかったことはつとに指摘されてきた。しかし、それは、明治から昭和にかけても結局変わることはなかった。伊藤永之介が描いた、複数の細かな業種をこなしながら、暮らしていく姿は、単に、貧しさからくるものではなく、自然災害、市場の変動、家族の変化に応じてリスク回避できるための、生き方であった。

たとえば、『湖畔の湖』や『消える湖』では、漁民として八郎潟で働く人々を季節ごとの労働描写によって丹念に分析するとともに、一方で、小さな土地で農業をしたり、漁業組合として地域の仕事に関わったりする人々も、同様に細かく描写していた。こうし

た複合生業によるリスク回避の知恵も、これまで考えたこともなかったような巨額な開発費が落ちていくことで、完全に機能不全になっていく様子が、『消える湖』では明瞭に描かれている。

これは、伊藤永之介の友人であった直木賞作家の千葉治平の『八郎潟』の分析を通じても証明できる点である。漁民の民具などが保障のために値段をつけられていく様子を千葉は丹念に記録しているが、その民具一つ一つの値段をつけていく権力側の執拗さと細かさは、もちろんのこと、それに対して反論の芽をつぶされていく漁民たちの様子も、わたしたちは記憶に残しておくべきだろう。

会話をすべて地の文に落としていく、伊藤永之介の文体のおかげで、それらの複数の業種が溶け合い、また、反発しながら並存する様子がありありと示されることが、本研究によってさらに明らかになった。

## 2) 移住について

平成27年12月には、東北大学で、「東北アジア研究センターシンポジウム：近現代における日韓双方の移住者の生活実践 マルチサイトな人類学の挑戦」が開催されたが、このなかで、伊藤永之介の秋田の東北における開発について、アジアの開発史のなかに位置付けなおす発表を行い、意見交換を行った。たとえば、伊藤永之介の手帳分析によって明らかになったが、「満州」帰国者の再入植の問題にも関心をもっており、下北半島の農協に取材をしている。

農村における帰国者の問題については、ほかに、『なつかしい山河』で描かれており、戦争や外地から帰ってきて、日本国内に居場所のない農民たちの悲劇をみつめていた伊藤永之介は、戦後日本の移住問題のなかできわめて有効な視点と素材を提供してくれることが明らかになった。

今後とも、移住研究との交流は進めていくつもりである。

## 3) 開発と慰安について

平成29年1月27日には、現代/世界研究会で、これまでの研究の総決算として、伊藤永之介の「どぶろく」論について、報告した。

法律と生活のはざまにあるどぶろく密造の世界が、中央集権的な農村開発のなかで、どのように歪められ、また、どのように農民たちを生かしていたのかについて考察した。それは、農村開発は決してお金だけで進められるのではなく、その現場を生きる人々の日常感覚、伝統的な飲食文化の調整、諦め、抑圧によって成り立っていることをあきらかにした。

また、どぶろくは、密造酒であり、酒税法違反であるが、これに対し、東北の人々は、法廷を含めて、さまざまな場所で闘ってきたことも明らかになった。たとえば、野添憲治

の『どぶろくと抵抗』(たいまつ社)で明らかのように、この「抵抗」は明治時代から始まっており、資本主義社会のなかで富を吸い上げられる農村の慰安剤、農村開発で廃れた心の癒しとしてのどぶろくの存在の重要性が浮かび上がってきた。

## 4) 年譜の作成

伊藤永之介の作品一覧を含んだ年譜を、下記のようにインターネットで公開した。伊藤永之介の人生と作品の折り重なる歴史が、わかるようになっている。なお、今後、研究を進めていながら、順次、増補を行っていく予定である。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~fujihara/伊藤永之介年譜.pdf>

## 5) 海外との比較

以上の研究成果を踏まえ、イタリアのシチリア島の調査をし、ここで活躍した作家であるジョヴァンニ・ヴェルガの作品と伊藤永之介の作品を比較する新たな課題を得ることができた。というのも、同じ後進資本主義国であり、膨大な小農を抱えた国家であったイタリアと日本は、まさに、農村過剰問題をどう扱うか、というのは国家の存亡をかけた重要なテーマであった。

とともに、イタリアでは南部、日本では東北地方は、ともに、遅れた地域とみなされ、農村開発のために莫大な予算が組まれたことも似ている。これは単に政策史的に論じるだけでは、不十分であろう。ヴェルガや伊藤永之介を通じて、資本主義社会のなかで運命を翻弄された農民たちの「内面」を知る手がかりを得ることができた。こんにちの日本文化の世界的な評価のなかで、伊藤永之介を後進資本主義国日本の矛盾をあらわす第一級の作家として再評価し、アメリカのジョン・スタインベック、ロシアのミハエル・ショロホフ、イタリアのジョヴァンニ・ヴェルガ、ポーランドのヴワディスワフ・レイモントなどととも、世界史のなかに位置付けることが可能であることを、今回の研究で明らかにできたことは、大きな収穫であった。

## 6) 金子洋文との関係

また、今回の調査のなかで明らかになったのは、戦後に国会議員にもなった社会主義者の金子洋文の重要性である。秋田県土崎港町の図書館での調査によって、金子と伊藤永之介の書簡のやりとり、あるいは、金子が伊藤作品を多数、演劇にしたり、テレビ番組にしたりすることに貢献していたことがわかった。『種まく人』の誕生地として、あるいは、プロレタリア文学発祥の地として、秋田の脈は、日本の文学史のなかで絶対に欠かせない存在であることはすでに指摘されていたが、金子を始めとするさまざまな分野に活躍する人物が、伊藤たちの作品制作のバックアップにあたっていたことは、秋田県のフィー

ルドワークを通じて、はじめて理解することができた。

あるいは今回の研究では十分に展開できなかったが、松田解子、千葉治平、今野賢三、新山新太郎をはじめとして、伊藤の周辺には多くの優れた作家があり、また、その作家も東北農村の開発と向き合わざるを得なかったことを考えると、秋田の文化人、作家を総合的に分析する必要性を感じた。

さらに、伊藤永之介の初期の作品には、「暴動」など、鉱山労働者の問題が登場する。これは松田の作品と重なる。このように、東北の開発は、単に、電力開発だけではなく、総合的な開発のなかで、農村が次第に交配していくことが秋田県立中央図書館での調査によって明らかになってきた。

#### 7) オルタナティブな開発について

本研究の目的である、オルタナティブな開発の道筋について、伊藤永之介の作品から学び得た点は下記の2点である。

(1) 開発は、うえから降ってくるものではなく、地域住民で、「何がお金おもたらすか」「何が雇用先をつくるのか」だけではなく、「住んでいて生きがいになるものとは何か」「実際に暮らしていて楽しいこととは何か」として話し合い、その経過を経て、国に申請するような方式でないかぎり、弾倉地帯における原子力発電所の建設や、海のみえない防波堤の建設などの愚挙を繰り返すだけである。

(2) 列島改造のうえで、土建屋にお金お落とし、そこから地方の税収を豊かにするという日本型福祉国家モデルは、すでに限界にきている。それは、自然環境配慮の視点から、露骨な無駄な工事にチェックが入るようになったし、開発しようにも、地域自体の体力が減退しているからである。そうではなく、建物やダムではなく、人の育成、すなわち教育(未来)に税金を投じることこそ、重要である。伊藤永之介は「少年工」という小説があるが、ここでは、貧しいために東京の工場にはたらきにいった小学生を、学校の先生が尋ねるシーンが描かれている。少年工は、病気になるって仕事もままならないが、日本の開発史が、こうした子供たちの教育を満足にうけられない犠牲のうえで成り立っていることを、伊藤は切々と描いている。伊藤永之介のリアリズムは、しばしば酷と言えるほど、子どもたちの貧困をえぐるように描くが、それは、現在の「子どもの貧困」と相通ずるテーマである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10件)

藤原辰史 「<食>とイデオロギー」環境思想・教育研究 (9)、2016、pp.116-119 査

読あり

藤原辰史 「食は教育の課題なのか 食育基本法をめぐる考察」佐藤卓己『岩波講座現代 学習する社会の明日』岩波書店、2016年、pp.179-202 査読あり

藤原辰史 「人類の耐久性 チャベックから考える(上)」現代思想 44(7)、2016年 pp.8-15. 査読なし

藤原辰史 「人類の耐久性 チャベックから考える(中)」現代思想 44(9) 2016年 pp.8-15 査読なし

藤原辰史 「人類の耐久性 チャベックから考える(下)1」現代思想 44(13) 2016年 pp.8-17 査読なし

藤原辰史 「人類の耐久性 チャベックから考える(下)2」現代思想 44(15) 2016年 pp.28-36 査読なし

藤原辰史 「屑拾いのマリア(1)」現代思想 45(1) 8-14 2017年1月

藤原辰史 「屑拾いのマリア(2)」現代思想 45(3) 8-15 2017年2月

藤原辰史 「屑拾いのマリア(3)」現代思想 45(6) 8-15 2017年3月

藤原辰史 「屑拾いのマリア(4)」現代思想 45(8) 22-32 2017年5月

〔学会発表〕(計 3件)

藤原辰史 「<食>とイデオロギー」[招待有り]環境思想・教育研究会 2015年11月8日

藤原辰史 「雑なるもの」の探求 「環境」を疑う [招待有り]「環境研究をひらく：着想、出版、伸展」2015年11月7日

藤原辰史 「コメント」「東北アジア研究センターシンポジウム：近現代における日韓双方の移住者の生活実践 マルチサイトな人類学の挑戦」2015年12月6日

〔図書〕(計2件)

藤原辰史 編『第一次世界大戦を考える』、共和国、2016年4月、269頁。

藤原辰史 『[決定版]ナチスのキッチン「食べること」の環境史』2016年7月、477頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

藤原辰史 (Fujihara Tatsushi)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：003622400

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし

##### (4) 研究協力者

なし